

旭日、遙かなり6

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

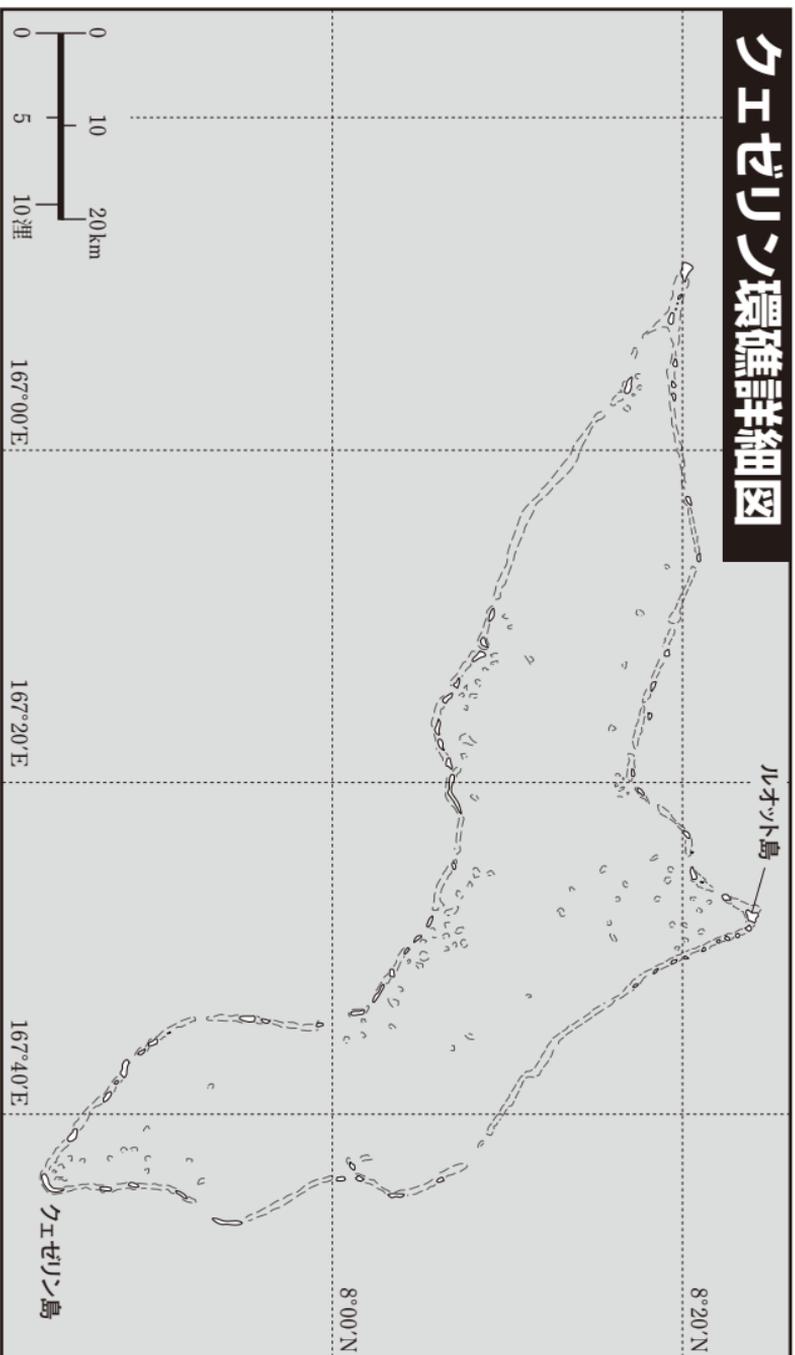
第一章	脅威の台頭	9
第二章	分裂の萌芽 <small>ぼうが</small>	43
第三章	大本營の選択	79
第四章	「武蔵」 <small>むさし</small> 再び	127
第五章	第三次ギルバート沖海戦	163
第六章	第二の「真珠湾」 <small>セカンド・パールハーバー</small>	237



ユーラシア大陸周辺図



クエゼリン環礁詳細図





旭日、遥かなり 6

第一章 脅威の台頭

1

不吉な響きを持つ音が、朝の大気を震わせた。

第一一航空艦隊の将兵が何度となく耳にした、空襲警報のサイレンだ。

「敵らしき編隊を探知。位置、クエゼリン本島より方位三〇度、五〇浬。敵はルオットに向かう公算大なり。戦闘機隊は直ちに発進、迎撃せよ」

クエゼリン本島の司令部から、ルオット島の飛行場に駐留する第二〇四航空隊に緊急命令が送られた。今年——昭和一八年二月、クエゼリン本島に設置された二一号電波探信儀が敵影を捉えたのだ。

「搭乗員整列！」

力強い号令がかけられた。

飛行服に身を固め、空襲に備えていた二〇四空の搭乗員が、指揮所の前に整列した。

第二〇四航空隊は昨年一二月、基地航空隊の大規

模な編成替えが実施されたとき、第四航空隊が改称された部隊だ。

昨年九月、タラワが米軍の手に落ちたときから、最前線のクエゼリンで戦い続けている。

クエゼリン本島に展開する第二〇一航空隊、第二五一航空隊と並んで、帝国海軍でも最も豊富な実戦経験を待つ戦闘機隊と言つてよい。

駐機場には、既に零戦三七機が敷き並べられ、中島「栄」一二型エンジンが、暖機運転の音を立てていた。

「発見された目標の位置、方位から判断して、敵は空母機である可能性が高い。全員、心して当たれ」
 令達台に立った司令の杉本丑衛大佐が慌ただしく指示を与えると、搭乗員たちがざわめいた。

昨年九月の第一次ギルバート沖海戦以後、米軍の空母は前線に姿を見せていない。

タラワに飛んだ偵察機が空母を発見したことはあるが、大きさや形状から、商船を改装した特設空母

と判断されている。

レキシントン級やヨークタウン級のような正規空母が前線に出現するのは、早くて今年——昭和一八年の末頃だろうと考えられていたのだ。

だが敵空母は、予想より半年早く姿を現した。

米軍の戦力再建は、日本軍の想像よりも早かったのかもしれない。

「過去の戦例から考え、敵は二機一組でこちらの一機にかかって来る。各員は極力僚機と離れず、小隊単位で敵と当たるよう留意せよ」

杉本司令に代わり、飛行長の清川義秀中佐が細かい注意を与えた。

飛行隊長判沢幸彦少佐が「かかれ！」を下令し、搭乗員が一齐に駐機場へと駆け出す。

慌ただしくコクピットに滑り込み、暖機運転を終えた機体が滑走路に移動する。

日本時間の午前六時二六分（現地時間午前九時二六分）、清川が力強く旗を振った。

判沢が直率する第一小隊の四機が、土埃を巻き上げながら離陸した。

従来、艦戦隊は三機を一個小隊とし、三個小隊で一個中隊を編成したが、昨年一二月より米軍の編隊空戦に対抗するため、一個小隊を四機で、一個中隊を二個小隊で、それぞれ編成するよう改められている。

第二小隊、第三小隊と、零戦の発進は切れ間なく続き、瞬く間に全機が離陸を終える。行動の素早さは、積み重ねた実戦経験の賜物だ。

高度を上げるにつれ、後にしてきたルオット島や薄茶色の環礁、環礁の外郭を形成する島々が、小さく、遠くなつてゆく。

「空き巣狙いだな」

第四小隊長を務める千波貴之中尉は、上昇を続けながら、敵の目論見を推測した。

クエゼリン環礁に展開する戦闘機隊は、ルオット島の二〇四空と、クエゼリン本島の第二〇一航空隊、

第二五一航空隊だが、二〇一空と二五一空はこの日——六月一八日、陸攻隊に随伴して、タラワ攻撃に向かっている。

クエゼリンを守る戦闘機隊は、千波が所属する二〇四空のみだ。

その二〇四空も、タラワの米軍航空部隊との戦いで消耗し、定数の五四機を割り込んでいる。

本来なら一旦後方に下がり、機体と搭乗員の補充を受けて部隊を再建しなければならぬが、戦況はそれを許さない。

クエゼリンの日本軍航空部隊とタラワの米軍航空部隊は、互いに一步も退くことなく、航空攻撃の応酬を繰り返しているのだ。

米軍は航空偵察や無線の傍受によって、クエゼリンが手薄になるときを狙い、機動部隊による攻撃をかけて来たのだらう。

零戦三七機では、戦力面で不安が残るが、今は二〇四空にクエゼリンを守り得るかどうかが懸かっている。

いた。

高度計の針が五〇〇〇メートルを指したとき、第二中隊の二番機を務める磯村直孝飛行兵曹長の機体が、激しくバンクした。

「来たか！」

千波は小さく叫び、周囲の空を見渡した。

敵機はすぐに、視界に入ってきた。

ちぎれ雲を背に、胡麻粒を撒いたような小さな影が数を増しつつある。

二〇機前後を一組とした梯団が四組だ。数は七〇機から八〇機。こちらの約二倍だ。

「正念場だぞ」

千波は両手で頬をはたき、自らに気合いを入れた。第二中隊長田口昌輝大尉の零戦が真っ先に機体を翻し、田口が直率する第三小隊の二、三、四番機が続く。

千波も後続機に合図を送り、三小隊に続いて突進する。

編成替え以前から組んでいる曾根五郎上等飛行兵曹の二番機、三ヶ月前に二〇四空に配属された岡田寿人一等飛行兵曹の三番機と市村正次二等飛行兵曹の四番機が、千波機に遅れることなく追隨する。

三七機の零戦が各小隊ごとに分かれ、左前下方の敵編隊に斬り込んでゆく。

敵機も零戦隊の姿を認めたのだろう、緩やかな角度で左に旋回しつつ、上昇して来る。

「……！」

敵機の動きを見て、千波は小さく叫んだ。

「敵機は戦爆連合。艦戦と艦爆がほぼ同数。零戦に正面から向かって来るのは、全体の半数程度」と睨んでいたのだ。

予想に反し、敵機は全機が零戦に機首を向けつつある。

艦爆や艦攻が、自ら戦闘機に挑みかかって来ることはあり得ない。

敵は、攻撃隊全機を戦闘機で編成していたのだ。

彼私の距離が、みるみる詰まる。

丸く太い機首や中翼配置の主翼が、視界の中で急速に拡大する。

発砲は、日本側が早い。

先陣を切った田口機の両翼から二〇ミリ弾の火箭がほとぼしり、後続する三機も発砲する。

開戦劈頭のルソン島攻撃を皮切りに、幾多の米軍機を屠ってきた強力な機銃だ。

この二月からクエゼリンに來襲するようになってたボーイングB17 フライイング・フォートレス

——「空の要塞」の異名を取る四発重爆撃機の分厚い装甲板にさえ、大穴を穿つ威力を持つ。

直径二〇ミリの大口径機銃弾が、グラマンF4F

ワイルドキャットやダグラスSBD ドーン・レスと 同じように、この敵機をも叩き墜とす光景を、千波は期待した。

期待に反し、敵機が火を噴くことはない。

第三小隊の四機が放った射弾は、高空の気圧だけ

を貫いている。

敵機が、千波機に向かつて来た。

両翼に発射炎が閃き、青白い曳痕が奔流の勢いで殺到して来た。

千波が被弾を予感したとき、敵弾は右方に逸れ、右主翼の近くを流れ去った。相対速度が大き過ぎ、照準を誤ったようだ。

敵機と千波機がすれ違う。

主翼と胴体に描かれた星のマークが千波の目を射るが、一瞬後には千波機の後方へと抜けている。

間髪入れず、二、三、四番機が、千波機の左前方から向かつて来る。

距離が詰まる時間が、これまでになく短い。F4 Fとの戦闘では、一度も感じたことがない。

千波は咄嗟に、操縦桿を左右に倒した。

零戦の機体が振り子のように振られ、コクピットの両脇や翼端付近を、青白い火箭が通過した。

射弾を放った敵機が、千波機の真下を、あるいは

左右を、猛速で通過する。

敵機が巻き起こす風に、機体が煽られそうだ。重量は、明らかに敵機の方が大きい。

千波が、射弾を浴びせる機会はない。相対速度が大き過ぎ、射撃の機会を掴めない。

発射把柄に力を込めようとしたときには、敵機は後方に飛び去っているのだ。

(F4Fじゃない)

鋭い戦慄と共に、千波はそのことをはつきりと悟った。

F4Fとは、タラワ環礁の上空で何度も交戦している。正面からの機銃戦であれ、旋回格闘戦であれ、速度感覚は覚えている。

今、戦っている敵機は、形状こそF4Fに似ているが、F4Fよりずっと速い。

明らかに、別の機種だ。

新たな敵機が二機、下から突き上げる格好で距離を詰めて来る。

千波は操縦桿を前方に押し込み、機首を下げた。照準器の白い環が敵機を捉えるや、発射把柄を握った。

ほとんど同時に、敵機の両翼にも発射炎が閃いた。上方から放った二〇ミリ弾の火箭と、敵機が放った多数の火箭が交錯する。

下から上に放ったためだろう、敵弾は千波機の手前で下方に逸れたが、千波が放った二〇ミリ弾も下向きのカーブを描いて虚空に消えている。

敵一番機とすれ違った直後には、二番機が目の前に迫っている。

千波は咄嗟に、操縦桿を左に倒し、左フットバーを軽く踏んだ。

零戦がほとんど横倒しになり、敵の新型機が九〇度回転した。

敵弾の青白い曳痕が、右主翼をかすめて通過する。敵機が後方に抜けた直後、千波機は左の翼端を支点にする形で旋回した。

垂直旋回のテクニックを用い、敵機の後ろに回り込んだのだ。

機体が水平に戻ると同時に、千波は発射把柄を握った。

両翼に発射炎が閃き、太い火箭が噴き延びた。

二〇ミリ弾が狙い過たず、敵機の尾部を捉えるか——と思いきや、火箭はその手前で弓なりの弾道を描き、下方へと消えた。

敵機は猛速で、千波機を振り切っている。

「くそつたれ！」

千波は、思わず罵声を漏らした。

相手がF4Fなら、主翼を叩き折るか、胴体を引き裂いたはずだ。

この新型機に、同じ手は通じない。

速度性能でF4Fはおろか、零戦をも上回っている。フル・スロットルで逃げられたら、捕捉する術はない。

千波は危険を感じ、後方を振り返った。

新たな敵機が、背後から迫りつつある。

千波は、咄嗟に操縦桿を左に倒した。

零戦が大きく傾き、急角度で旋回を開始した。

F4FやカーチスP40、ウォーホーク、ロッキードP38、ライトニングなら、ここからの形勢逆

転が可能だ。旋回格闘戦になれば、零戦に勝てる敵機はない。

後方の敵機が射弾を放ったのだろう、右主翼の翼端付近を火箭が通過する。

首をねじ曲げると、視界に敵機が入って来る。これまでより、距離が詰まっているようだ。

千波は、操縦桿を右に倒した。

左に旋回していた零戦が、一転して右に傾き、逆方向に旋回を開始した。

目まぐるしい方向転換によって頭が振り回され、目が回りそうだ。遠心力は見えざる万力と化し、肉体を締め上げる。

敵新型機は執拗だ。

右旋回に転じた千波機の後を、なおも追って来る。

得意の小回り転回によって背後に回り込めるはずが、容易に後ろを取らせない。

じりじりと距離を詰め、一連射を放って来る。
(やられる——！)

そう直感したとき、後方からの圧迫感が消えた。後ろを振り返ると、敵新型機が黒煙を噴き出し、

高度を下げてゆく様子が見えた。

千波機の右後方に、僚機の機影が見える。

小隊二番機の曽根上飛曹の零戦だ。

目まぐるしく旋回を繰り返す千波機を見失うことなく、「二番機の援護」という二番機の役割を果たしてくれたのだ。

小隊の三、四番機は、千波や曽根の動きに付いて

来られなかったのか、姿が見えなかった。

このとき、戦場はルオット島の上空を通り過ぎ、礁湖の真上にもつれ込んでいく。

空中から湖面に向かって、何条もの黒煙が伸びて

いるが、それも急速で飛び回る零戦や敵新型機の主翼が切り裂き、プロペラに巻き込んで、吹き飛ばす。時折、被弾の炎が空中に躍り、敵弾を受けた機体が大きくよろめく。

右主翼の中央に敵弾を受けた零戦が、二〇ミリ弾の誘爆によってばらばらになり、砕け散った主翼の破片や引き裂かれた胴体の残骸が白煙を引きながら、礁湖に落ちてゆく。

敵機に背後を取られ、至近距離から火箭を撃ち込まれた零戦が、コクピットを粉碎され、ジュラルミンの断片や風防ガラスの破片を撒き散らしながら墜落する。

背後を取った敵機をやり過ぎすべく、緩横転をかけた零戦の真上から、別の敵機が射弾をあびせる。

背面になったところに下腹を撃たれた零戦は、エンジン・カウリングと胴体の合わせ目付近から火を噴き、白煙を引きずりながら墜落する。

零戦も、果敢に反撃する。

背後を敵機に取られた零戦が、射弾を浴びる寸前に垂直旋回をかけ、位置を入れ替える。

後ろに回られた敵機が、フル・スロットルで振り切るよりも早く、零戦の両翼から火箭がほとばしり、敵機の主翼に突き刺さる。

付け根付近を大きく抉られた右主翼が、風圧に負けて後方に折れ曲がり、ちぎれ飛ぶ。

片方の揚力を失った敵機は、錐揉み状に回転しながら墜落し、空中の戦場から姿を消す。

二機一組でジグザグ状に飛び、零戦一機を追い詰めていた敵機の横合いから、別の零戦が射弾を浴びせる。

真横から二〇ミリ弾を撃ち込まれた敵機は、エンジン付近から黒煙を噴き出し、機首を傾けて高度を下げる。

僚機を失った敵機は、形勢不利を悟ったのか、機体を右に横転させ、垂直降下によって離脱する。

零戦は得意の小回り転回を活かして好射点を占め、

敵機を一機、二機と墜としているが、全般的な戦況は不利だ。

被弾し、火を噴いて墜落してゆく機体は、明らかに零戦の方が多い。

礁湖には、墜落機が上げた波紋が幾つも広がり、燃え残ったガソリンが油膜を作っている。

千波も、曾根も、味方の不利を知る術はない。

後方から、あるいは横合いから突っ込んで来る敵をかわし、あるいは目の前に現れる敵機に射弾を叩き込むだけで精一杯だ。

敵機に二〇ミリ弾を撃ち込み、火を噴かせても、撃墜を見極める余裕はない。

敵機が視界の外に消えたときには、また別の敵機が迫っている。

ともすれば、生き残っているのは自分たちだけではないか、と錯覚するほどだ。

それでも、時折敵機と飛び交い、上下左右に旋回を繰り返す零戦の姿が視界に入る。

二〇四空の戦友は、まだ健在なのだ。
「負けぬ！」

千波は小さく叫んで、自身に気合いを入れた。

自分と曾根が墜とされたら、その分味方が苦しくなる。

何よりも、ここはクエゼリンだ。日本軍の基地であり、友軍の将兵も見守っている。

苦しくとも、踏みとどまる以外にない。

また新たな敵機が二機、千波機の左前方から向かって来る。

二番機は、一番機の右後方から援護する態勢だ。

千波は操縦桿を前方に押し込み、機首を下げた。

敵機の両翼に閃光が走り、火箭が殺到してきたときには、千波機はそこにはいない。無数の敵弾の真下をくぐり抜け、敵機の下腹に潜り込んでいる。

千波は、操縦桿を目一杯手前に引きつけ、左上昇反転をかけた。

視界の中で、空が目まぐるしく回転する。

反転を終え、機体を水平に戻したときには、千波は敵二番機を照準器の環に捉えている。

敵機の主翼や胴体の一部が、照準器の環の外にはみ出すほどの近距離だ。

今度こそ——その意を込めて、千波は発射把柄を握った。

重々しい連射音と共に、太い火箭が噴き延びた。

二〇ミリ弾の赤い曳痕が狙い過たず、敵機の垂直尾翼や胴体を捉えた。

火花が散り、むしり取られたジュラルミンの破片が飛び散る。被弾の衝撃に耐えかねたかのように、敵機がよろめく。

機首を下げて礁湖に突っ込むか、と思ったが、千波の期待に反し、敵機は墜ちない。それどころか、姿勢を立て直そうとしているように見える。

千波は、今一度発射把柄を握った。次の一連射がとどめとなることを確信した。

両翼に、発射炎が閃くことはない。発射把柄を握

っても、空虚な音を立てるだけだ。

元々二〇ミリ弾は、携行弾数が少ない。

敵機の数に惑わされ、何度も空振りを繰り返したため、撃ち尽くしてしまったのだ。

千波は罵声を漏らしながらも、機銃の切り替えス イッチを入れた。

発射把柄を握ると同時に、目の前に閃光が走り、細い火箭が噴き延びた。

機首二丁の七・七ミリ固定機銃だ。

二〇ミリ機銃に比べれば非力だが、敵機は手負いだ。七・七ミリでも墜とせるはずだ。

七・七ミリ弾の曳痕が、敵機に吸い込まれる。主翼、胴体、水平尾翼と、あらゆる場所に命中する。

「これでもか、まだ駄目か！」

罵声を放ちながら、一連射、二連射、三連射と射弾を放つ。

七・七ミリ弾の曳痕が、主翼といわず胴といわず突き刺さるが、敵機は墜ちない。

先に二〇ミリ弾を撃ち込んだときには、今にも墜落しそうにふらついたが、今度は揺るぎもしない。

(七・七ミリでは力不足か)

そのことを、千波は悟った。

二〇ミリ機銃でも、一撃では墜とせなかつた機体だ。七・七ミリ機銃では、撃墜どころか手傷を負わせることすら難しい。

前方の敵機が、機体を翻した。

左に回転し、翼端を先にして垂直降下に入った。

「逃がさん！」

千波も一声叫び、操縦桿を左に倒した。

初見参の新型機に零戦が対抗できることを実証したい。何としても、一機撃墜の戦果を上げたい。

左に横転した零戦が、垂直降下に転じる。

見えない斜面を滑り降りるようにして降下し、逃げる敵機に追いつがる。

距離を詰め、今度こそとどめを——と目論むが、敵機との差は開く一方だ。

米軍機に独特の太くごつい機影がみるみる小さくなり、千波機から遠ざかってゆく。

「畜生！」

千波は舌打ちしつつ、引き起こしをかけた。

降下速度は、敵機の方が上だ。追撃は、諦めざるを得ない。

上昇に転じようとしたとき、風防ガラスが光った。青白い曳痕の連なりが、風防の右脇をかすめ、前方へと抜けた。

千波は失態を悟った。

敵一機を追い求めるあまり、後方への警戒を怠ったのだ。

千波は、操縦桿を左に倒した。

零戦がほとんど横倒しに近い角度まで傾き、左旋回を開始した。

後方から、二機が追いつがって来る。

敵機が新たな射弾を放つたのだろう、風防の左脇を敵弾がかすめる。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。